「花鳥風月」のピアノ演奏と書とのコラボレーション　以下「まちなかお昼のおんがくかい」すべて、撮影：原田直樹

まちなかお昼のおんがくかい

Machinaka Ohiruno Onkgakukai

会場　SCARTSコート

入場料　無料

主催　札幌文化芸術交流センター SCARTS（札幌市芸術文化財団）

後援　［**第1回**～**第6回**］
北海道、札幌市、札幌市教育委員会、北海道文化財団、beyond2020プログラム
［**第7回**］北海道、札幌市
［**第8回**］札幌市、札幌市教育委員会
［**第9回**～**第10回**］札幌市

音楽を基点に、さらなる表現と出会う

「まちなかお昼のおんがくかい」は、ランチタイムに気軽に音楽に触れていただこうと、平日の昼間、SCARTSコートを会場に入場無料で開催している演奏会シリーズです。第1回から第7回までは、クラシックの名曲を中心にさまざまな楽器やパフォーマンスを織り混ぜて開催しました。第8回以降は、ブラジル音楽やアンビエント・ミュージックを取り上げたり、音楽と舞踏をコラボレーションさせたりと、音楽を基点にしつつも、さまざまな表現や楽しみ方を紹介しました。

「花鳥風月」

「珠玉のヴァイオリン名曲集」

「ヘンゼルとグレーテル」

「魅惑のソプラノコンサート」

「ヘンゼルとグレーテル」朗読と演奏によって、物語が彩られていく

第1回まちなかお昼のおんがくかい～花鳥風月～

日時　2018年11月2日（金） 12:10～12:55
出演　反保沙季（ピアノ）、樺澤奈々（書道）

ピアノ演奏と書道パフォーマンスとのコラボレーション。花・鳥・風・月のそれぞれにちなんだピアノ曲の演奏に合わせて、100×300cmという大判の紙にのびのびと書が描かれていきました。演奏曲は、シューマン歌曲集『ミルテの花』（リスト編曲）より「献呈」、ドビュッシー『ベルガマスク組曲』より第3曲「月の光」、など。

第2回まちなかお昼のおんがくかい～珠玉のヴァイオリン名曲集～

日時　2018年11月15日（木） 12:10～12:55
出演　瀧村依里（ヴァイオリン）、入江一雄（ピアノ）

読売日本交響楽団首席ヴァイオリン奏者・瀧村依里と、世界的に活躍するピアノ奏者・入江一雄を迎えてのコンサート。演奏曲はチャイコフスキー『なつかしい土地の思い出』より「メロディ」、ドビュッシー「ゴリウォークのケークウォーク」などクラシックの名曲の中からヴァイオリン曲を厳選しました。

第3回まちなかお昼のおんがくかい～ヘンゼルとグレーテル～

日時　2018年12月5日（水） 12:10～12:55
出演　木管五重奏団ウィンドアンサンブル・ポロゴ、onちゃんおはなし隊：森さやか、依田英将

木管五重奏団ウィンドアンサンブル・ポロゴと、HTBアナウンス部によるonちゃんおはなし隊のコラボレーション。フンパーディング作曲のオペラ「ヘンゼルとグレーテル」の演奏付き朗読を行いました。朗読と息の合った演奏に、観客も物語の世界へと引き込まれていきました。

第4回まちなかお昼のおんがくかい～魅惑のソプラノ・コンサート～

日時　2019年1月11日（金） 12:10～12:55
共催　公益財団法人北海道文化財団
出演　佐々木アンリ（ソプラノ）、石田敏明（ピアノ）

道内で活動する若手演奏家に活動の場を提供することを目的に、北海道文化財団がオーディションを経て任命するHAFアーティストによるコンサート。数多くあるソプラノの名曲の中でも、メンデルスゾーン「歌の翼に」、シューベルト「のばら」など、特に有名な歌をセレクトして演奏しました。

ランチタイムにひとときの演奏を楽しもうと、多くの観客が集まる

「ピアノの魔術師リストによせて」

「愛を奏でて」

「春の暖かな光によせて」

第5回まちなかお昼のおんがくかい～ピアノの魔術師リストによせて～

日時　2019年2月12日（火） 12:10～12:55

出演　永沼絵里香（ピアノ）

第17回リスト音楽院セミナー（札幌コンサートホール主催）にて、最優秀受講生として表彰された経歴を持つピアノ奏者・永沼絵里香を迎えて、ピアノの魔術師と呼ばれたリストの曲を中心にしたコンサートを行いました。演奏曲はリスト『パガニーニによる大練習曲集』より第3曲「ラ・カンパネラ」、ラヴェル「水の戯れ」など。

第6回まちなかお昼のおんがくかい～愛を奏でて～

日時　2019年3月15日（金） 12:10～12:55

出演　長内一真（ピアノ）、関口さくら（フルート）

ピアノ奏者・長内一真とフルート奏者・関口さくらを招き、コンサートを開催しました。演奏曲は「愛」をテーマに選曲し、クライスラー「愛の喜び」、ロジャース&ハマースタイン2世「マイ・フェイバリット・シングス」、モリコーネ「ニュー ・シネマ・パラダイス・メドレー」、中島みゆき「糸」など、幅広いジャンルから聞きなじみのある曲が演奏されました。

第7回まちなかお昼のおんがくかい～春の暖かな光によせて～

日時　2019年4月9日（火） 12:10～12:55

出演　亀谷妃都美（フルート）、真鍋陽絵（マリンバ）

札幌を拠点に活動する若手音楽家の亀谷妃都美と真鍋陽絵を迎え、フルートとマリンバという珍しいデュオによるコンサートを行いました。菅野よう子「花は咲く」や、ポーランド民謡「クラリネットポルカ」、荒井由実「やさしさに包まれたなら」など、民謡や歌謡曲を中心にした親しみやすい選曲で多くの観客を魅了しました。

「まちなか夜のおんがくかい～鮭×酒～」

4人の息の合った演奏に、会場も大いに沸いた

鮭箱を使ったライブステージや譜面台のほか、カホンやギターも登場した

「小樽 酒商たかの」が厳選した、夏におすすめの日本酒が並ぶ

出展ブースもARAMAKIによるもの。鮭箱の印刷が特徴的

第8回まちなか夜のおんがくかい～鮭×酒～

日時　2019年7月19日（金） 17:30～21:00
会場　SCARTSコート（演奏会）、SCARTSモールA・B（物販・飲食ブース）
協力　ARAMAKI
出演　古舘賢治（ギター）、大山賢司（パーカッション）、木村ゆう（ピアノ）、大島さゆり（フルート）
出店　小樽 酒商たかの、MORIHICO.、ARAMAKI

札幌の短い夏を楽しもうと、いろいろな文化施設が一斉に夜間開放やイベントを行う「カルチャーナイト」に合わせ、特別編「夜のおんがくかい」として「鮭と酒」をテーマに開催しました。会場構成を、宮大工と楽器職人によるクラフトマンユニット「ARAMAKI」が手掛け、役目を終えた新巻鮭（あらまきさけ）の木箱を活用したカウンターやステージが出現。小樽の地酒専門店「小樽 酒商たかの」による日本酒の販売や、コーヒーカンパニー「MORIHICO.」の展示ブースを設置し、SCARTSモールが一晩だけ、お酒を挟んだ社交場に。コンサートでは、地元で活躍するミュージシャンがブラジル音楽やブルースを取り入れた楽曲を演奏。賑やかな夜となりました。

「爽秋アンビエント・ミュージック」。水中マイクを使用し、水の音にエフェクトをかける

「寒鴉」～音と舞踏～では、フルートと舞踏による、緊張感のある公演に観客が息をのんだ

第9回まちなかお昼のおんがくかい 爽秋アンビエント・ミュージック

日時　2019年9月23日（月・祝） 14:00～15:00
出演　chiharu mk（実験音楽、電子音楽）

札幌在住の電子音楽家、chiharu mkによるコンサートを開催しました。黄金岬や石狩の海の音、置戸町の木々や麦畑が揺れる音、鳥の声、風の音など、北海道各地でフィールドレコーディングした音を組み合わせ、その場で水の音をハイドロフォンで操りエフェクトをかけたり、シンギングボウルを演奏して音を混ぜたりしながら、リアルタイムで音楽をつくり上げていきます。途中、音の素材や演奏法、使用している機器の説明が入ることで、電子音楽の面白さにロジカルにふれる機会にもなりました。

第10回まちなかお昼のおんがくかい「寒鴉」～音と舞踏～

日時　2020年1月6日（月） 14:00～15:00
会場　SCARTSコート
出演　田仲ハル（舞踏家）、名越梨紗（フルート）
アフタートーク　14:45～15:00
出演　田仲ハル
聞き手　森嶋拓（北海道コンテンポラリーダンス普及委員会）

北海道内外で活躍する舞踏家、田仲ハルによる舞踏公演を開催しました。会場であるSCARTSコートの白い空間から連想し、北の雪原に一羽の鴉が餌を求めて迷い込む季語である「寒鴉」をテーマに創作された本作。名越梨紗によるフルートの澄んだ音色と、田仲ハルの舞踏が影響し合い、静けさと、時に激しいやりとりの緊張感に息をのむような40分間となりました。終演後に行ったトークでは、舞踏という表現の深みに触れました。

「寒鴉」〜音と舞踏〜アフタートークの様子。左から、森嶋拓、田仲ハル

第10回まちなかお昼のおんがくかい「寒鴉」〜音と舞踏〜 アフタートーク

Machinaka Ohiru no Onkgakukai

日時 2020年1月6日(月) 14:45〜15:00
会場 SCARTSコート
出演 田仲ハル(舞踏家)
聞き手 森嶋拓(北海道コンテンポラリーダンス普及委員会)

森嶋 森嶋と申します。どうぞよろしくお願いします。これから田仲ハルさんとのトークを行いたいと思います。ハルさん、踊ったばかりですが、お話しできますか。

田仲 大丈夫です。

森嶋 まず、舞踏について簡単にご説明させていただきたいと思います。舞踏は暗黒舞踏という名前で生まれた日本の踊りです。戦後の激動の中、日本人全体がクラシックバレエやピアノなど、西洋の音楽や芸術に傾倒していった時代に、「西洋文化に対するアンチテーゼ」として舞踏という日本人の身体性を強く打ち出した踊りが生まれました。1959年に作家である三島由紀夫の小説『禁色』のタイトルを借用した作品を土方巽が現代舞踊協会で発表したのですが、非常に衝撃が強く、そこから舞踏が誕生したと言われています。舞踏はその後、1980年代にヨーロッパで大ブレイクします。当時のヨーロッパはアメリカのダンスの影響を強く受けていたので、ここでもアメリカのダンスへのアンチテーゼというか、そうではないものを探していて、舞踏という日本の踊りがヨーロッパの事情にハマったのだと思います。今では世界中で舞踏フェスティバルがたくさん行われています。以上が舞踏の簡単な説明です。

踊りは「祈り」

森嶋 それでは、田仲さんにいろいろとお話をお伺いしていきます。まず、舞踏を見たときに、「一体何を表現しているのか」という質問をされることが多いと思うのですが、いかがですか。

田仲 舞踏の中にはストーリー性があるものもありますが、大抵は「見る人に何を残すか」ということが焦点になります。公演をやるときや作品をつくるときなどは、テーマはあるのですが、ストーリーというのは少し違っていて、テーマを踊るということが多いです。確かに「何を表現しているのですか」とよく聞かれますし、いろいろなダンサーの人がいて、いろいろな踊りの表現があって、いろいろな踊りの哲学を持っていらっしゃると思うのですけれども、舞踏というより僕の個人的な意見で言うと、僕は「空気に動きを刻印している」という意識でやっています。動きというものは、同じことは二度と起きない。はじまったものはすでに過去のものなのです。打ち寄せる波もそうですよね。同じことは二度と起きない。同じ形のものなんて絶対にない。あれだけ海に波が来ていても同じ形のものはないです。人間の行為もそうで、踊るという行為は、いろいろな思いを刻印していったり、それがやがて海を渡ってほかの国に行ったり。ロマンチックな話ですけれども、そういう「踊る」という行為自体に、「祈り」のようなものが入っているといいますか。僕の先ほどの踊りを見て、どこが祈りなのだと思う人もいるかもしれ

ないのですが、僕なんかはそういう風に思ってやっていますね。

森嶋　物語性というキーワードが出てきましたが、物語はないけれども、物語性があるということがひとつのポイントかなと思います。例えばある種の「演劇」というのは物語なので、起承転結があるわけです。最後の1分だけ、つまりオチだけを見ても面白いかと言われると、そうではないことが多い。しかし、「舞踏」の場合は物語性に留まるので、積み重ねた物語の文脈がなくても、最後の1分だけで面白い可能性があるじゃないですか。ダンスというのは物語を積み重ねるというよりかは、物語性という瞬間を積み重ねているという感じですね。

田仲　そうですね、一つひとつの「瞬間」の積み重ねです。例えば、楽しくダンスをするのも、クラブで踊るのももちろん踊りですけれども、僕は、自分で何をやっているのかがわからないままで踊っているのが、一番良くないものだと思っているのですね。つまり、流れてしまう踊り、惰性で踊っているというか。今、この瞬間は何なのかをきちんと把握して踊らないと、それは踊りではないと思っているのです。構成されたパーツの積み重ね、それがひとつの舞台をつくっているという風に思っています。

万物に光を当て、すべてを肯定する

森嶋　今回、「寒鴉」というテーマがありました。白と黒のモノトーンが対照的で、フルートの名越梨紗さんの役割が、雪原にも見えますし、ハクチョウのような存在にも見えて、フルートがまるで言葉を発しているかのようにも聴こえました。寒鴉について、語れる範囲でお願いします。

田仲　ここを最初に下見したとき、白い空間だし、冬だしということで、考えました。本当は雪原で踊るのが一番いいのでしょうけれども、たぶん、寒くてしようがないですよね(笑)。僕は、カラスという動物が結構好きです。侘しさがあったり、滑稽だったり、格好がよかったり。カラスを一度、テーマにしたかったのですね。ただ、まっすぐカラスをテーマにしてしまうとひねりがないなと思ったので、冬の季語である「寒鴉」にちなんだテーマにしました。黒い衣装も持っていましたし。また、名越さんのフルートについては、今言われたように、まるで雪原が音楽を奏でているかのような光景がつくれたらいいなと思っていました。

森嶋　一般的なダンスでは美しさとか、華麗さを求めると思うのです。でも舞踏というのは、例えば醜さとか、動けない体、老化やぼけ、麻痺など、そういった一般的にネガティブなイメージがあるものにも光を当てている。それが舞踏の面白さのひとつだと感じます。例えば、カラスを嫌いな方は少なくないと思うのですが、そういったものにも光を当てる踊りが、世界中で大きな価値を見出されたというか。

田仲　はい。そう思います。やっぱり、皆さんの中には虫が嫌いな人もいらっしゃるだろうけれども、実は、舞踏というのは、虫だったり鳥だったり、身体が不自由な人だったり、実は万物に光を当てているのですよね。一見、醜いとか、アングラだとか、おどろおどろしいとか思われがちだけれども、本当は僕たち舞踏家は、地上にあるあらゆるもの、草や木、虫、鳥、風、海……にヒントを得て、拾い上げていきます。だから、そういったものすべてを拾い上げるのと同時に、そこに光を当てているという意識を持っていますね。

森嶋　そうですよね。あらゆるものを肯定するという感じがします。

田仲　舞踏は否定的な踊りだと思われがちですが、実は真逆で、すべてを肯定しています。

森嶋　舞踏というと「アバンギャルド」なイメージが強くて……。白塗りで、頭も剃ってとか。実際にそうしたイメージを先行して話題にされることもあると思います。でもやっぱり、舞踏の面白いところは、大野一雄さんと土方巽さんという創始者に当たるふたりがいて。彼らが対象的な存在として、太陽と月のように光と闇をつくったというのが、ここまで発展した理由ともいえますよね。舞踏は一部のダンス関係者からは、「異端」とみられ、世界的にもダンスと舞踏は真逆といわれることもありますが。

田仲　舞踏には2本の柱があって、大野一雄さんと土方巽さんが両極端で違うのですけれども、僕は土方巽さんの直系の方です。大野さんのほうが、どちらかというと、人気が高いですね。なぜかというと、やっぱり、愛とか世界平和みたいな感じがするからです。

土方さんのほうは、どちらかというと、自分の肉体をもっと痛めつけていくというか、もっとずっとストイックな系統なのです。僕の系統というのは土方さんから真っすぐ来ていますけれども、今もこんな風に血が出たり、痛めつけて何ぼみたいなところがありますね。

舞台には、写真や絵のように余白を残す

森嶋　インパクトやリアリティーなど、いろいろとあると思うのですけれども、作品をつくるうえで大事にされているのはどういったことですか。

田仲　その時々によって違うのですけれども、テーマになるものは、今回の「寒鴉」のようなものだったり、例えば、時事問題だったりするときもあります。いろいろなテーマはあるのですが、僕は、3Dで肉体を持っていて、この空間を立体的に使って踊りをやっているのだけれども、シーンごとに僕は紙芝居を見せているつもりなのです。何か、平べったい、平面のスクリーンというか、一つひとつの絵の場面を見せている感じです。ですから、空間を使うということは意識していないのです。先ほどあちらにばーっと走っていってしまいましたけれども、ああいうものも、この空間を意識して使っているということではなくて、僕があちらに走っていったという「一枚の絵」を見せているような意味合いでやっているのです。

森嶋　なるほど。絵というのは写真にも置き換えられるのではないかと思います。映像だとすべてを語り尽くすけれども、写真や絵というのは想像の余地というか、見ている人に余白を与えますよね。例えば、踊っている人の写真を見たときに、この後どういう動きをするのだろうと、自分の頭の中で動かすことができる。そういった効果を狙っているといったら少しニュアンスが違うかもしれませんが、そのようなことを大事にしているのですね。

田仲　そうですね。やっぱり、余白ですよね。次にどう行くのだろうとか、次にどういった絵が現れるのだろうかということを、できるだけ見ている人を裏切るようなものを出したいなと思っています。そうしないと面白くないですからね。予定調和なものほど面白くないものはないですよね。今日の公演も、シーンの流れなど、少しだけ決めている部分はあったのですが、ほとんどが即興です。やっぱり予測不能なスリリングさが必要だと思います。お客さんがいて、私は見る人ですと座っている。その見ている人というのは、安全圏にいるわけですよね。でも、やる側と見る側という風にパキっと分かれてしまう関係性というのは、同じ空間を共有している意味がまったくないと思います。だからといって、客いじりをするというわけでもないですが、でも、予定調和ではなく、何が起きるのだろうかとどきどきするような、予測不能であること。それこそが舞台の醍醐味なのではないかなと思っています。

森嶋　なるほど。そういったものを一緒に共感して、体験するということですね。それでは、今後の活動など、もしあればお願いします。

田仲　森嶋さんが「北海道舞踏フェスティバル」というものを毎年やっておりまして、海外から何組かの舞踏家を呼びます。舞踏というのは、日本で生まれたものなのに、日本では本当に知られていないのですが、ヨーロッパ、アメリカ、南米、またアジアでいうと、タイやインドネシア、韓国、中国など、世界中に広まっています。世界中からそういった舞踏家を呼んで、札幌、あるいは、道内の地方都市で公演するというフェスティバルをやっています。その「北海道舞踏フェスティバル」も2020年で4年目になるのかな。僕は、北海道の舞踏家ということなので、その舞踏フェスティバルには、毎回ホスト役として出ています。

森嶋　田仲さんの舞踏ワークショップは月1回開催されていると思うのですけれども、これは何歳からでも参加できるものなのでしょうか。

田仲　そうです。この間も杖を突いた65歳の女性が参加しました。何度も心肺停止になって常に死と隣り合わせの経験をされているという方でしたが、その方も、5時間、踊り通しました。すごかったですね。踊るという気力です。いつ死んでもおかしくないような人がああいうことをやるわけです。それを見えると、われわれは何をやっているのかなと思ってしまいますね。とても太刀打ちできない。

森嶋　人生経験もあるのでしょうね。

田仲　それもありますね。だから、死を背負っているということに、すごく切実なものがあります。踊りというのは、バレエとか、「白鳥の湖」とか、きれいなものも

いいですけど、踊り手はみんな死にますからね。全員が間違いなく死ぬので、死というものが常に後ろにある状態でやっている。僕はそれが舞踏ではないかなと思っています。

森嶋　ありがとうございます。では、この辺でアフタートークを終了とさせていただきたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。

田仲ハル

1980年初頭より、ツアーや複数の舞踏カンパニーの旗揚げに参加。近年は共演のために海外からアーティストの来日が相次いでいる。映画出演、モデル、異種アーティストとのコラボレーションなど、活動は舞踏の枠を越境する。2017年札幌国際舞踏フェスティバル招聘。つくば国際アーティストインレジデンス招聘。2018年、2019年、北海道舞踏フェスティバル招聘。台湾ダークネスダンスフェスティバル招聘。

森嶋拓

コンテンポラリーダンス、舞踏のプロデューサーとして数々の公演、ワークショップやダンスフェスティバルを手掛ける。CONTE-SAPPORO Dance Centerプロデューサー。北海道コンテンポラリーダンス普及委員会委員長。飛生芸術祭ディレクター。札幌市民芸術祭奨励賞、北の聲アート賞奨励賞（ビルダップ賞）を受賞。

田仲ハル、名越梨紗